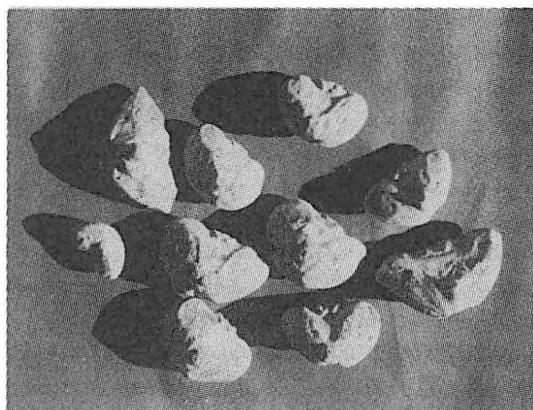


トゲのない中国産のヒシ

齊藤吉永



中国・杭州にて。1986. 10. 10 入手

中国通の友人K氏が本年も3ヶ月余り中国を廻って帰国した。

土産話の中で露天の店で売っていたという紅菱 *Trapa bicornis* Osbeck の美しさを強調していたが、後日その折りの写真を届けてくれて私も始めてその紅色の美しさに驚嘆した。

それにも増して土産として持ち帰ったというトゲのないヒシを差し出されて、すでに話しにはきいていたものの一層の驚きを禁じ得なかった。

早速書架の中国の図鑑類(中国高等植物図鑑、中国水生維管束植物図譜、中国水生高等植物図説)を挙げたが、これ等にはどこにも記載されてはいなかった。

種名は判らないが杭州附近に多らしく、ゆでて露天で売っていたものだという。

形は小さきままでどれが標準の大きさなのかも判然としないが将来所定の手続きを経て生品を入手し栽培して生態等を確かめたいものと思っている。

この正体を御存知の方の御教示を乞うものである。

(1986. 11. 16)

〔付記〕ここで紹介されている棘のないヒシの正体は、ツノナシビシ *Trapa acornis* Nakano と思われる。中国の一部地域に見られるようで、日本及び近隣地域のヒシ属を研究された中野治房博士によって新種として記載されたものである。その論文から、ツノナシビシに関する部分の一部を訳出しておく。

“……私は、中国上海に近い嘉興南湖産の角のない特異なヒシの実をいくつか入手した。それらは大きく平たいものであった。同年(1944年)に行なった栽培実験の結果、この実の角を欠く性質は遺伝するものであることが明らかになった。葉や花の諸特徴は、むしろヒシやオニビシに似ていた。その実だけがたいへん特異なわけで、4つのがく片は全て早くに脱落し、角はできなかった。私はこの点を強調し、それを新種 *Trapa acornis* とすることを提案したい。栽培実験で採れた実は、親のものよりもはるかに小型であったので、サイズの変異は自然界でもおこるのかもしれない。しかし、角が欠けるというのは固有の性質である。”(Bot. Mag. Tokyo 77 (1964), p162~)。

(角野康郎)

奈良市水上池にサンショウモ

磯部亮一

今年〔1986年〕10月12日、奈良市在住の西村保子さんの案内で、奈良盆地北部の古い溜池や古墳の濠など、水草相について概観したので報告しておく。

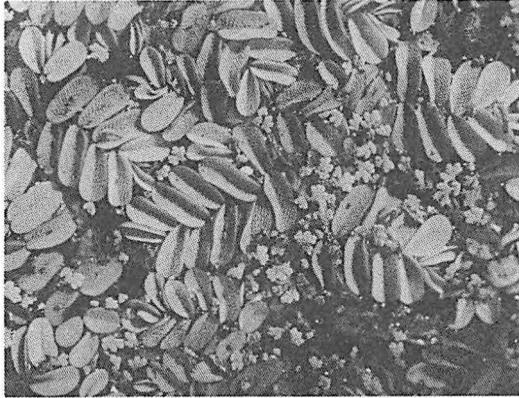
大和郡山付近は、金魚の産地として全国的に有名なところで、溜池の多い地域である。20個程の溜池を見てまわったが、2~3の池でオニビシ・ヒシ・ホテイアオイを観察したぐらいで、注目すべき水草類の生育する池はほとんど見られない。

北上して郡山城跡の濠、薬師寺西の大池、垂仁天皇陵の濠など、住宅周辺の池は富栄養化が進行して、アオコ〔*Microcystis*〕が水面に多く見られた。

平城京跡の北東に位置する、ヒシアゲ古墳現仁徳皇后磐之媛命陵の外濠〔前方部だけを囲むコの字形〕の水域には、コウホネ・ジュンサイ・ヒシ・カキツバタの見事な群落が見られた。そのほかこの水域には、沈水性で水上に白花を観察したが遠くで種名の確認は出来なかった。岸边には、湿生植物のスイランなども見られた。

ヒシアゲ古墳の南方に隣接している水上池には、オニビシ・ハスの群生、岸边にはマコモ、水生シダ植物のサンショウモ・アカウキクサ、浮水性のコケであるカズノウキゴケの群落が見られた。

サンショウモは、筆者の住んでいる知多半島でも1957年頃、脇田晴美氏によって調査報告がなされているが、



奈良市水上池のサンショウモ 1986. 10. 12

近年の水質汚染などで消滅したのか、現在知多半島では、同種の生育確認はされていないことから、生態について特に関心のある水草の一種であった。

〔付 記〕今から15年以上前の水上池の水生植物について、興味深い記録があるので紹介しておこう。出典は『奈良市史 自然編』（昭和46年）である。中略部分を明示せずに引用する。

「水上池は満水面積が15ヘクタールもある巨大な池である。池の中央に幅2メートル余りの堰堤が東西に通じ、その北側を上池、南側を下池と呼んでいる。

(1) 上池の水生植物

北部の水深が浅い地域には、ヨシ・マコモ・ガマなどの大型挺水植物が池の周辺にそって環状に繁茂している。やや深い地域にクログワイ・マルバオモダカの群落がみうけられる。ハスは池の中央部まで繁茂している。

水深が深いところの水面にはオニビシ・ガガブタなどが水面をおおい、ウキクサ・サンショウモなどが水面に浮遊している。

この池の北部には食虫植物のタヌキモ類が多く、浮遊性のものにはタヌキモ・ノタヌキモ・フサタヌキモがあり、沈水性のものにはミカワタヌキモ・ヒメタヌキモなどが見られる。奈良県内でこのように多種類のタヌキモ類の生育している溜池はほかに例がない。

沈水性の水草はオオトリゲモ・マツモ・フサモ・クロモなどで、池の全域に分布している。

なお、小清水卓二博士は昭和10年、京都府の巨椋池に生育していた食虫植物の珍種ムジナモをこの池に移した。その後20数年間よく繁殖していたが、現在はその姿がほ

とんどみられない。

(2) 下池の水生植物

池の周辺の浅い地域にはマコモ・ヨシ・ウキヤガラなどが繁茂し、中央部から東部までの全域にハスがびっしり繁茂している。

池の西部の水の深い地域には、オニバス・オニビシ・ガガブタなどの浮水性の水草が水面をおおっている。秋のころ、水面に紫色のオニバスの花や白色のガガブタの花が咲き乱れて格別美しい。

浮遊性の水生植物には、ウキクサ、アオウキクサ、サンショウモなどが、沈水性植物には、フサモ、マツモ、クロモ、オオトリゲモなどがある。」

(角野 康郎)

Aquatics Vol. 8 No. 2 抄録

○ The Fringed Bog Orchid (Michael J. Bodle)

水辺や湿地に生育するラン科の *Habenaria* 属について、その生育地や繁殖法が書かれている。フロリダ州に生育する5種は「危機にさらされている種に関する州の法令 (Endangered Species Act)」のリストに載っており、目立たない植物であるため、その存在の貴重さは最後の一個体が除草されるまで認識されることはないだろうが、その時にはもう手遅れなのであると締めくくっている。

○ Death in the Dose (Agrichemical Age)

'Agrichemical Age' の許可を得ての転載記事。農薬などの化学合成物質の人体に対する影響は、実際は或る適用量 (dose) を越えて起ることが科学的に知られているにもかかわらず、なぜ多くの人々が百万分の一の危険率というごく少量の物質に対しても拒絶反応を示すのかについて論じている。話しは心理学におよび、①ガンなどの恐い病気に対するいけにえを探る感情的要求のあること、②自然およびその生成物が本質的に純粋で体によいという根深い信念のあること、③欲求不満や憤りを発散させるために大企業の悪口を言うというはげ口の無い要求のあることなどが書かれている。

記者注：これに類似した内容のものが APMS のニュースレター No. 22 に載っていたが、毒性に対する意識がアメリカでは変化しつつあるのだろうか？